

電車のポイント进行操作した

信号塔

現在、市電は西四丁目とすすきのを結ぶ一路線八・五^キを残すのみとなっていますが、全盛期には桑園線、豊平線など二十五^キにも及ぶ距離を走っていました。そして、複雑に路線が交差するポイントでは信号塔が立っていました。

駅前通の道庁赤レンガ前に立っていた信号塔を覚えていますか。パイナップルを逆立ちさせたような格好で、職員が一人入り、駅前通を北上していく電車を苗穂方面と鉄北・桑園方面に振り分けることが主な仕事でした。

札幌市内には道庁前、三越前、すすきの交差点の三カ所に信号塔がありました。その塔の中には、電気ポイントのスイッチがあり、ボタンを押せばポイントが切り替わる仕掛けになっていました。手動で行う作業なので、前輪だけが進路を変えた途中で、うっかりポイントに戻してしまい、脱線させたこともあったそうです。時代が進むとポイントの切り替

えは「全自動転てつ連動装置」という機械が行うようになりました。

しかし、信号塔はなくなりませんでした。それは、信号塔にはもう一つの役割があったからです。電車には、地下鉄の運転

席にあるような無線装置がありません。そこで、緊急時などに各電車と連絡をとる職員が必要でした。障害物があつて先に進めない時や運行間隔が空きすぎた時など、内線の電話により、本部からいろいろな指示がありました。職員は信号塔を降りて、その指示を直接電車の運転手に連絡したそうです。

この信号塔も電車の各路線の廃止とともになくなつてしまい、今では、札幌市内で見ることができません。



道庁前の信号塔（奥の建物はグランドホテル）「市営十周年記念写真帖（昭和17年札幌市電気局発行）」より